

Kiko

ブエノスアイレス

気候ネットワーク

〒604-8124 京都市中京区高倉通四条上ル高倉ビル3F

Tel:075-254-1011 / Fax:075-254-1012

E-mail:kikonet@jca.apc.org http://www.jca.apc.org/kikonet/

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-7-3 半蔵門 WF ビル 2F

Tel:03-3263-9210 / Fax:03-3263-9463

E-mail:kikotko@jca.apc.org

気候ネットワークは、地球温暖化対策に取り組む市民のためのネットワークです。

「Kiko」は、温暖化問題の国際交渉の状況を伝えるための会期内、会場からの通信です。

大臣会合始まる

今日から大臣会合が始まり、COP10も最終盤に入る。大臣会合では、条約10周年：成果と将来への挑戦、気候変動の影響、適応策と持続可能な開発、技術と気候変動、気候変動の緩和（排出削減、吸収対策）の4つらウンドテーブルが予定されており、小池環境大臣はパネリストとして参加する。京都議定書は2012年までの第1約束期間の先進国の削減目標を合意したものの、それ以降も削減が必要であることは、主要大排出途上国を含めて共通の認識だろう。しかし、今回のCOPでは、京都議定書から離脱を宣言した米国と産油国の暗躍がこれまで以上に目立つ。今日からの大臣会合で、京都議定書の発効を前にした今回のCOPにふさわしい今後の指針が示されることが期待される。

将来枠組みに向けて セミナーの行方は？

アルゼンチンの提案を受けて、2005年に将来の温暖化対策に関するセミナーを開く方向で議論されているものの、締約国は3つの論点で対立しているようだ。

1つ目はセミナーでの内容について、2つ目は、気候変動枠組条約の中だけで検討するのか京都議定書の枠組みでも検討するのか、3つ目は、COP10でセミナーの位置づけや内容を決めその結果をCOP11に報告し国際交渉の中に将来的な枠組みの議論を組み込むのかである。

EUは、国によって多少意見の相違があるが、このセミナーは条約と議定書両方の中で検討を行い、その結果は国際交渉の場に報告されるべきと考えているようだ。他方、議定書を離脱しているアメリカは、セミナー開催までは抵抗しないものの、条約の中でのみ将来の対策について情報交換するようなものをイメージしているらしい。インドや中国など途上国は、アメリカとほぼ同じ立場であり、その位置づけと将来の議論への影響には警戒感が残る。

途上国をとりしきる 産油国の要求

今の段階でどれだけ温室効果ガスの排出削減を行ったとしても、すでに大気中に排出された温室効果ガスによって、特に小島嶼国やアフリカ諸国などで温暖化は進行する。悪影響に対する対策を行えるように支援することが急務となっている。しかし、この問題は長く進展をみず、途上国の不満が年々高まってきており、COP10での焦点のひとつとなっている。

これまでは途上国グループと先進国グループとの対立構図が主であったが、今回は、途上国グループ内での対立が目立っている。サウジアラビアなど産油国が、どの議題でもG77+中国（途上国グループ）の調整役を買ってでて小島嶼国やアジアのグループなどの押さえ込みに走り、温暖化の影響をひどく受ける小島嶼国などへの資金支援を産油国が横取りする構図ができあがろうとしている危険な状況がある。アメリカは産油国の抵抗を利用して交渉を遅らせている。

重要な議題のひとつである特別気候変動基金は、これまでの議論で適応策と技

術移転とそれに関連するキャパシティビルディング活動を対象とすると確認されていたにもかかわらず、産油国の巻き返しにより、化石燃料先進技術や化石燃料の非エネルギー利用の促進なども対象として入ってきている。適応策支援においても、温暖化対策実施による影響に関する支援を行う活動が列挙されている。

サウジアラビアなどの産油国は先進国並みの経済水準を持つ。日本もこの問題に関しては、産油国の強硬姿勢に反対の立場を示している。しかし、ただ反対の立場であると表明することだけでは、今回の産油国の攻勢を抑えることは困難だ。本当に温暖化の影響を最も受けることになる国に支援を行うことを、日本ははっきりと明言し、積極的に交渉に参加することが必要だ。

京都クラブ拡大へ！

14日、京都議定書批准国から来ているCOP10参加者は、会場の入口で、「京都クラブ」のメンバーズカードをもらった。気候行動ネットワーク（CAN）が行なった議定書発効祝いのひとつである。「京都クラブ」のメンバーが増えることを祈る。

経産省は政府全体の代表？

13日夕方、経済産業省が米国代表ワトソン氏など「大物パネリスト」を集めてサイドイベントを行なった。表向きのテーマは「途上国のエネルギー問題に関する国際連携」だが、会場では産構審・将来枠組み検討専門委員会の「中間とりまとめ」の英訳が配られ、そのお披露目の場となった。産構審・将来枠組み検討専門委員会で委員長を務める石谷氏が、途上国に焦点を当てながらもその内容を説明し、パネリストのコメントも中間とりまとめに対するものであった。

その「中間とりまとめ」にいう将来枠組みとは、第2約束期間以降を2013年から2030年や2050年の長期間とするなどを提案し、法的拘束力をもつ総量削減と国別目標やしかりした遵守という京都議定書の基本的構造とは全く異なるもの

で、日本政府の方針ではない。だが、随所でいかにもそれらしいコメントが付されたことなどあって、聴衆には日本政府全体の方針かのような誤解を与えかねないものだった。会場からは政府代表団に回答を求める質問もあり、14日発行の『eco』が「日本政府のポジションではない」ことに注意を促したほどだ。

会場から批判的な質問が出たが、特に、短期の数値目標についての質問に対しては、司会をした経産省から「国内対策のためには継続すべきで、報告書はそれに追加するもの」とのコメントがあった。短期の数値目標は最も重要な点だが、「中間とりまとめ」はそのことに何もふれていないだけでなく、むしろ、やるべきでないとして読めてしまうものだ。

また、日本のエネルギー関連のデータも日本の実情からほど遠い偏った内容だった。日本のエネルギー効率がいまい

民生家庭部門や運輸部門によるものだが、74年のオイルショックでの対応とトップランナー制度をもとに日本のエネルギー効率が世界のトップになったと強調し、産業部門の「乾いた雑巾」説を応援するようなものだ。また、2040年にもなってやっと登場するCO₂削減の「新しい先進技術」とは、CO₂固定化と原子力だと明らかにした。また、政府の投資が非常に大きいことを強調したが、問題はその中身だ。3600百万ドル(ドイツ:約250百万ドル)もの巨大予算の65%が原子力であり、自然エネルギーに割かれているのはわずか5%程度に過ぎない(ドイツ:20%)。これでは日本のエネルギー政策の問題を誰も理解できないだろう。15日には中央環境審議会での検討結果の報告イベントが予定されている。日本の二分された将来枠組みへの姿勢がCOPでも明らかになった形だ。

北極の異変 ~ 影響は動物そして人間へ

北極協議会と国際北極科学委員会は、温室効果ガスがすぐに減らされなければ、北極圏においてどのような地球温暖化の影響がでるのかという分析結果をまとめた報告書を発表し、サイドイベントで紹介した。

北極の平均気温は、世界のほかの地域や過去数年に比べて2倍の速さで毎年上昇している。特に、多くの地域では、夏より冬の気温上昇が大きくなっており、アラスカやカナダ西部では、冬場の平均気温が、この50年間で3から4上昇した。このまま温室効果ガスを減らさなければ、北極全体の平均気温は、100年後には大陸部で3から5、海上では最大7上昇する。冬場にはさらに大きく、100年後には大陸部で4から7、海上では7から10上昇するという。

そのために、過去30年間に、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク(もしくは、テキサスやアリゾナ)をあわせたのと同じくらいの面積の海水がなくなった。また、北極の陸氷の大部分があるグリーンランドでは、1979年から2002年の間に、ほぼスウェーデンと同じくらいの大さの氷床がとけた。2002年は過去最大規模で氷床がとけ、標高2000メートルにある氷床までとけたほどだった。

影響は北極だけにとどまらない。海面上昇という形で世界各国に影響を及ぼしている。氷に住むアザラシをえさにしているホッキョクグマにとっては、氷はえさにたどりつくまでの道のようなものである。その氷がとけ、えさがとれなくなっている。ハドソン湾のホッキョクグマは、やせ細り、子孫を残すこともままならない状況である。この地域の生態系の頂点に立つホッキョクグマの数が減れば、北極の生態系に大きな影響がでる。

さらに、そのホッキョクグマなどを食糧としているイヌイットなど北極に住む人たちもとても大きな影響を受ける。彼らも、ホッキョクグマと同じように氷の上を移動し、狩猟をしてきた。しかし、今は伝統的な方法で天気を予報することは難しくなり、氷が薄くなったせいで、氷の上を安全に移動することもできない。また、彼らは、オゾン層破壊によって、これまでの世代が浴びてきた量より30%も多く有害な紫外線(UV-B)を浴びている。他にも、風によって世界中から集められ濃縮された化学物質の影響も真っ先に受けるなど、健康も脅かされているのだ。

さらに、永久凍土が溶け出したため、土地の劣化や侵食が進み、道路が陥没し

たり、建物が倒れたりして、多くの人たちが日常生活において大きな影響を受けている。

極地の氷は、太陽からの熱を80%から90%反射し、宇宙に光を効果的に出す重要な役割を果たしている。地球温暖化によって、氷が溶けると、宇宙に出る光の量が減り、土や海が太陽から吸収する熱の量が増え、さらに地球温暖化を進めてしまう。悪循環はとまらない。

これら最新の科学による北極における温暖化の影響報告を聞いたアラスカに住む先住民たちは、「今日はとても悲しい話を聞いた。自分達が毎日経験していることがもっと悪くなるようだ。自分達の経験を科学的にすばらしく証明してくれたものの、それをどう活かしていってくれるのか。非附属国でもなく、国連など国際的な支援は受けられない自分達に国際的にどのように支援をしてくれるのか。」と訴えた。

Kiko COP10通信 NO.2

2004年12月15日発行

発行/編集 気候ネットワーク

浅岡美恵、大久保ゆり、剣持智美、

中島正明、山岸尚之

現地連絡先(携帯):

+54-911-40315221(剣持)